書き下ろしエッセイ

トランスジェンダーとして生きていること

塩安九十九（しおやすつくも）

G-FRONT関西所属。新設Cチーム企画主宰。
講演活動や映像制作、LGBTのピアサポート、原稿執筆など。
共著『トランスがわかりません!!』『恋愛のフツーがわかりません!!』
小学生用DVD教材『いろんな性別〜LGBTに聞いてみよう』
をご希望の方は下記まで必要枚数とご住所をご連絡下さい。
lgbtsougi@gmail.com

真ん中が著者。
プライドパレードのボランティア感謝パーティにてニューヨーク旅行がくじで当選したところ。

大変だった小中高時代

最初に性別に違和感を持ったのは幼稚園に入る前だった。島根県の海岸の町に生まれた私はよく海に行っていた。水着のビキニが何とも言えない違和感を湧き上がらせた。「これは自分が着るものではない」と強く感じたのを覚えている。小学校に上がると違和感は増大していった。全てが男女に分かれているからだ。自宅にあった百科事典に「性転換症」という「病名」を見つけたが、やっと自分を言い表す言葉に出会った安堵感と一生隠しておかねばならない秘密を持った罪悪感とがないまぜだった。学校という集団生活は本当にサバイバルという言葉がふさわしい。私は完全に女の子として振る舞うことも無理があり、かと言って自分のありのままの言動もできないので妥協点として「かなりボーイッシュな女の子」の範疇に収まる戦略を自然に取っていた。さらに私を追いつめたのは二次性徴だ。自分には生理は来ないのではないかという全く根拠のない希望は中二の時に粉砕した。保健の授業では生理用品としてナプキンしか紹介されなかったが、タンポンやムーンカップ、ピルなどいろいろ対処方法があることを教えるべきだと思う。

性別を変えて生きて行くなんて許されるはずがないと思っていた。「二十歳までに死なないといけない」そう本気で思っていた。しかし何が結局自殺を決行させなかったのかというと、やはり死ぬのが怖かったということ。それと高校二年の時、とても仲が良かった女友達から告白されたこと。「こんな自分でも好きになる人がいるんだ!」と驚き救われた。また決定的だったのは、親に秘密でやっとこさ行った精神科の医者に泣きながら自分のことを話した後、「女なんだから女として生きるしか仕方ないですね」と言われたことだ。しかし出版されはじめた数少ないLGBT関係の本を長時間立ち読みし「医者は当てにならない」という結論に至ることができ、やっと開き直ることができた。「一度死んだ気になって生きてみよう。」

高校卒業の時に家族にカムアウトすると両親は「早く言ってくれたらよかったのに」「病院や同じような人の集まりがあるなら行った方がいい」などと言ってくれて、予想していたような拒絶や否定がなく安心した。友達へのカミングアウトは親しい仲にだけ伝えた。長年の付き合いの中で薄々感づいていた友達もいて、カムアウト後も変わりなく関係が続いている。

この小中高時代は過酷だった。正しい情報とロールモデルがあれば全く違った、もっとマシな青春が送れたと思う。少なくない数のLGBTユースが大人になれないのを考えると、生き延びた自分はラッキーだと思う。

大学デビュー

大阪に移り住み、大学に入ると同時にLGBTの団体にも早速行ってみた。G-FRONT関西は1994年に結成されたLGBT団体でセクシュアリティ、ジェンダーに関わらず誰でも入会して活動ができる。ここのトランスジェンダーが集まる会に毎月行って、当事者の生の声を聞き、力強い生きざまに触れることで、私は一から自分を定義しなおすことになった。「男ならこうするべき」ではなく自分が本当は何が好きで何が快適なのか。性別の尺度ではなくそのままの自分として必要なものを選んで行こうと思うようになった。

その結果、やはり胸のない上半身になりたいという気持ちは変わらなかったので二十歳の時に手術をした。自分の体を自分にとって快適なものにするということは、セックスをどう行うかにも関係してくる。LGBTサークルでのセックスや身体についてオープンに語り合う雰囲気は私の価値観も大きく変えた。「トランスジェンダーは自分の身体を嫌うべき」という考えは私からセックスを遠ざけていたが、性別も身体も自分自身が定義しなおしカスタマイズできることを知り、自分らしいセックスを模索できるように

なった。

大学は心理学科だったのでLGBTへの精神的サポートの勉強もできると考えていたが、思っていた以上に保守的で、いまだにLGBTは発達上の障害や心理的な問題として捉えられており愕然とした。そのため隣の社会学科の方がおもしろく感じ、ジェンダーやセクシュアリティについて講義している教授と仲良くなり、LGBTについての授業をさせてもらえることにもなった。偶然同じ学科にいたレズビアンの友達といっしょに、同級生に向かって自分たちの体験や知識を伝えるのは、大変だけれどやりがいのあることだった。

また、いろんなアルバイトをすることで社会に出てもなんとかやっていけそうだと自信がついた。性別をどうするかも、仕事内容や社員の雰囲気ひとつで融通が効いたりすることがわかり、生き延び方がありそうだと思えた。大学卒業後は臨床心理士になるために大学院浪人をしたが合格せず、以前から働いていた書店でバイトを続けた末、25歳の時にその会社に正職として就職することになった。

社会人になってみた

従業員はアルバイトも含めて20人程度の家族経営のような小さな会社だった。私と同時期にゲイの友達も入社しLGBTであることをことさら隠さなくてもよい職場環境になっていった。結局アルバイト時代も含めると、そこで12年も働いたことになる。会社で気を付けていたことは下記だ。

(1) 会社でやるべきことができるように自分の状態を整える。時には妥協する。例えば自分の高い声が嫌だからと小声で接客するのはまずい。

(2) 残念ながらLGBTであることはまだリスキーなことなので最低限 +α の仕事をする。クビになるリスクを最小限にするには一目置かれたり、業務上かかせない存在になることが一番の安全策だ。

(3) 公私の境界線を吟味する。自分のLGBTライフをどこまで職場で披露するかも人によって異なる。職場はみんな素敵な人たちばかりだったが、プライベートで会うことはほとんどなかった。私はその方が仕事がしやすかった。

(4) 職場の人間関係を観察し、自分がどの位置にいるかを把握する。日ごろから敵を作らず全体的に良好な関係を築くことでピンチの時にも救われる可能性が上がる。

(5) つまらないことでも何かにこだわる。それが自信とモチベーションにつながる。「これを語らせたら熱い」みたいなのができると仕事も楽しくなるかもしれない。

(6) 労働基準法と職場の社則を知っておく。有給や残業についてだけでなく、ハラスメントに遭った場合のことも考えて確かめておいた方がいい。

30歳の時から男性ホルモンの注射をはじめたが、職場の人たちとは毎日会っているせいか、声が低くなったり容姿に変化が出てきてもあまり気にされなかった。男性社員として扱われたいわけでもなかったし、制服もなく、男女の役割分担もなく、トイレも男女共同だったので、私から会社に何か要求することはなかった。やりたいことを仕事にするのが理想的だが、当時の私としては仕事内容は二の次で、食べていける金額をストレスなく安定的に稼ぐということが一番大事な事だったので、この職場に巡り合えて本当にラッキーだったと思う。

いろんな活動をしてみた

振り返ってみると、LGBTサークルに18歳で入ってから15年の間にいろんなことに挑戦したと思う。最初の数年間はLGBTの団体をベースにして様々な活動に参加し、たくさん学ばせてもらった。読書会でフェミニズムやゲイリブの歴史や現在を学んだり、行政が人権条例などの制定を検討していたら意見書を書いて提出したり、議員と話したり、その過程でLGBTの人権がどのように法律で規定・保護され得るのかを学んだり、ピアサポートで具体的な問題解決のために翻弄したり、そうした活動を内外に発信したり記録として残すために機関誌を発行したり、大学の学園祭で催しをしたり、LGBTを題材にした演劇を公演したり等々だ。

自分の大学でLGBTについての授業をさせてもらったことをきっかけに、他大学や教育機関、行政などでの講演活動も増えていっていた。2000年の前半だったので現在よりも偏見は強く、感想には「理解できない」「気持ち悪い」など平気で書く人も割といた。「自分もLGBTです」とか「友達がLGBTだ」などと書いてくれる人はほとんどいなかった。それが十数年後の今は200人授業であれば10人弱はLGBTだと自己申告するような変化が起こり、時の流れを感じる。教育機関での講演でも生徒に実際にカムアウトされる教員が増え、具体的な対応が求められているケースが増えた。講演依頼が増えていくと、自分たちが出向かなくてもLGBTについて学べる教材があれば便利だな、と思うようになっていった。そこでドキュメンタリーやドラマを撮影しDVD教材を作った。また、活動を展開していくうちに、LGBTコミュニティならではの問題点なども見えてくるようになっていった。そうしたトピックやそれぞれ発信したいことをまとめたミニコミが編集者の目に留まり、出版することになったのはとても誇らしいことだった。また昨年は、助成金が通ったおかげで、ろう者でLGBTの友人とともに動画を作って配信したり、LGBTに関する手話を普及させるサポートブックを発刊することができた。（Youtubeで「ろうLGBTインタビュー」で検索するとご覧いただけます。）

カナダに来てみた

30歳を数年過ぎて、何かもっと新しいことを

知りたいと思えるようになっていた。以前は自国の言葉や文化を熟知していても、性別を変えて生きることは厄介なことが多いので、言葉も通じなければ性別の風習もわからない異国で暮らすなんて無理だと思っていた。しかし海外に住んでいる友人を旅行で訪問したこともきっかけとなり、仕事や活動を一旦辞めてカナダに行ってみることにした。カナダのトロントを選んだのはLGBTの暮らしやすさやコミュニティの成熟が日本と比べると随分先を行っていると思ったからだ。

トロントでの暮らしは、私の英語力のなさを除いては快適だ。LGBTの一般的な認知があることが暮らしの空気を随分変えるものなのだと感じている。カナダでは2005年から同性婚が認められている。ドラマでもLGBTが主人公や脇役で出てくるし、基本的に社会の一員として認識されている。街中を歩いてもレインボーステッカーが貼ってあるお店（LGBTフレンドリーというサイン）が多数あり、同性同士で手をつないで歩いている人たちも見かける。銀行などでも私の身分証明書にはF（女）と記されているけれど、トランスジェンダーということで不快な目に合ったことはない。

6月頃になると街にパレードの装飾が増え、
最寄りの駅の改札も虹色に。

519コミュニティセンター。
トロントのLGBTの活動の拠点となっている。

中心街にはLGBTのための大きなコミュニティセンターがあり、毎日いろいろなサークルが集まって会合したり催しをしている。トランスジェンダー向けの夕飯無料サービスも毎週月曜日の夜にあって参加している。そことは別に、LGBTと移民とホームレスを専門に扱っている保健センターもあり、ワークショップや相談業務などを行っている。ハローワークのような施設でも、トランスジェンダー向けの支援を行っていて、就活の際の窓口となっている（ちなみにカナダの履歴書には顔写真や性別、宗教、持病など差別の原因になる事項は掲載しないのが普通だ）。LGBTであることで家を失った若者のための支援シェルターもあるし、多くの教会がLGBTフレンドリーを打ち出して受け入れている。このように生活全般でLGBTであることを隠す必要がなかったり、困った時に支援を受けやすい状況がひとりひとりの精神と生活の安定につながっていると実感している。

今まで日本ではいわゆる人権活動の前の方でワーワー言って支援提供者側としてやってきた私だが、カナダで完全なエンドユーザーとして恩恵だけを被って暮らしてみると、何やらもう頑張らなくてもいいような気がしてくる（とは言え活動は趣味のようなものなので結局やると思うけど）。毎日友達と楽しく暮らして、細ごまなことに一喜一憂し、コミュニティが居心地が良いようにマナーを守り、余裕があれば他の人のために何かし、お互いの人権を尊重し合ってさえすれば、別に特にやりたいことがなくても、十分満足できる人生になると感じている。そうして生きているカナダの人たちにかなり影響されている。

トランスジェンダーであることに悩み、人や社会にビクビクし、毎日死ぬことばかりを考えて、将来に絶望していた学生時代の私に、今の私が何か言うとしたら下記だ。

・世間の常識やいわゆる「普通」を信仰してもいいことはあまりない。「～ねばならない」「～すべき」は建前であって真実ではない。早く開き直って自分にとって何が大事かという独自の価値観を作るが吉。

・自分を否定する人もいれば、肯定する人もいる。いい出会いがしたいなら、人に会いに行くことを惜しまない。数撃てば当たるのであきらめずに出歩く。人間関係を大事にする。

・変化することに慣れる。人も状況も自分の体も精神もずっと変化していくものとして認識する。変化しないことが安定なんじゃなくて、変化にも身をゆだねられるほど自分に余裕と楽観思考があれば問題ない。

・無理せず自分がしたいことに正直になる。やりたいことがなくても単に楽しいことを探し自分を大事にする。自分が生きている意味は自分で決める。

プライドパレードの様子。
通りはたくさんの人でうめつくされる。

・今の状態を選択していると自覚し、そしていつでもそれを選びなおせて、本当は自由なんだと忘れない。選択に困ったら明日死ぬ場合を考える。

・日本だけが住めるところではない。世界は広いのでどこかに自分が住みやすいところがあるはず。なので外国語を勉強しておくこと…。（汗）